〈青森県史〉の窓 210

「戸」へを集める川

古舘　光治
（前是川縄文館館長）

私が好きな八戸市の風景の一つに、同市湊町の館鼻公園にあるグレットタワーから見る風景がある。館鼻は新井田川河口の右岸にある丘で、公園やタワーがある部分の標高は27メートル。ちなみに、グレットは八戸地方で「全部」を意味する方言から命名されている。小高い丘に立つさらに20メートルほどの高さに建てられたタワーなので、その眺望は申し分ない。

正面には小中野から中心街にかける緩やかな上り地形に合わせて町並み（建物群）が広がっている。中心街とその近辺にはビルが林立している。眼下には岩手県山間部を水源とする新井田川がゆるりと流れ、少し遡って大きくカーブした所には、八戸市初の本格的な近代工場として大正時代から稼働している八戸セメントが大きく見える。その蛇行の先には市民病院の建物も見える。

館鼻から見た八戸港
＝1960（昭和35）年5月9日・青森県史デジタルアーカイブスより

右手側に目を転じると、工業港の水路が伸び、その奥には馬淵川の土手が見える。馬淵川はここから直接太平洋に注ぐが、この形になったのは昭和初期の付け替え以降のものである。それ以前は工業港の部分が川筋で、館鼻の下で新井田川と合流して海に出るようになっていた。館鼻下は、岩手県北を源流とする馬淵川と新井田川が集まって海に注ぐ場所だった。そのことの意味を改めて考えてみたい。

馬淵川は、岩手県葛巻町の北上高地を源流とし、折爪岳の西側を通って一戸町、二戸市、三戸町、南部町、そして八戸市の櫛引を通る。櫛引は四戸でもある。櫛引の近くでは五戸から流れてくる浅水川も馬淵川に合流する。そして海に向かう。

新井田川は、岩手県久慈市西部の北上高地山中の2箇所を源流とし、岩手県九戸村、軽米町を経て八戸市島守に入る。島守は四戸の一部である。島守を経た新井田川、是川、新井田を通って海に向かう。

このように考えると、二つの川は歴史的には中世糠部の川として見ることができる。馬淵川は先に記したとおり、一戸、二戸、三戸と四戸を通る。新井田川は九戸、四戸を通る。二つの川が合流する場所が八戸。一から九の戸のうち、五つの戸がこの二つの川に関連する。

戸の地域が記録に登場する中世には、八戸根城に南部氏（八戸氏）が居を構える。その後、南部町聖寿寺に居を構えた南部氏が戦国の覇者となって三戸に居を移す（三戸氏）。その南部氏は盛岡に移るので、馬淵川流域から時代の覇者は離れることになる。馬淵川と新井田川の流域は、盛岡藩の領域となり、その後盛岡藩から分かれる八戸藩の一部ともなる。いずれにしても南部領として江戸期を過ごす。

明治以降になると、新井田川と馬淵川の河口地域には近代工業の波が押し寄せる。1921（大正10）年に日出セメントが新井田川下流岸に開業する。八戸市の近代工業の端緒となり、昭和になると馬淵川河口近くに日東化学や日本砂鉄鋼などの工場が開業する。昭和に入って切り替えられた馬淵川により誕生した「三角地帯」は、八戸市の工場群の中心地帯となっている。

改めて館鼻の風景に戻る。八戸市の工業の端緒となった日出セメントは、今も八戸セメントとして稼働している。向かいに広がる三角地帯では、工場群の煙突から毎日白い煙が吐き出され、八戸市の工場の活動を直接目に知らせてくれる。工業港を挟んだ館鼻向かいの第二魚市場は、時期になると漁船が連なる。その背後にはたくさんの住宅とその奥の八戸市の中心部が連なる。

目を東に転じると、湊地区から鮫地区にかけての住宅街が広がる。その東の端には、ウミネコの繁殖地としての蕪島が見える。この高いタワーからの風景は、二つの川がもたらした歴史を改めて思い知らされる。

『東京と青森』659号
東京青森県人会　2023年3月